

描かれた、壮大精緻なロシアの詩文学の像は、主としてお教えをうけた者が翻訳に参加した、わが国で初めてのロシア詩のアンソロジー『ロシア詩集』（修道社、1958年）によって、その一端をうかがうことができる。

先生がロシアの詩人の中で殊に愛されたのは、ネクラースフであった。

「ヴォルガのほとりへ行ってみよ——誰のうめきがひろがっているか このロシアの大河の上に？ このうめきは うたと——曳き舟のうたとよばれている！……」（『大玄関わきの黙想』）先生の朗唱が今もあざやかに耳にひびく。先生には、『デカブリストの妻』や、『赤鼻の酷寒（マロース）』や『ロシアは誰に住みよいか』などの名訳がある。

さらに、記憶されるべきは、わがロシア文学会の創立にはたされた大いなるご功績である。日本ロシア文学会は、1951年7月に創立総会が東京でもたれ、翌年から年に1度総会と研究発表会が定期的に行われたほか、ロシア語ロシア文学の普及のため東京や仙台で幾度か公開講演会が催された。学会報告も1955年に第1号が出されるようになったが、日本ロシア文学会の前身の「プーシキン会」以来、つねに縁の下の力持ちとして献身的に学会の雑務をになわれたのは、谷先生であった。学会の今後の進路を思い定めるためにも、創立時の原点と諸先輩の労苦は、永遠に記念されるべきであろう。

中村融氏を偲んで

米 川 哲 夫

本年4月29日、中村融氏が心不全で亡くなられた。享年78歳であった。氏は本学会創立以来の会員であり、長年に渡って理事を務められ、また明治大学在勤中は専任1人のところを、2度も研究発表会・総会の当番校の大任を果された。

氏は明治44年長崎県五島で下永家に生を受けられ、小・中学校を東京で終えたあと、東京外国語学校露語部に入学された。在学中からロシア文学に傾倒し、故中村白葉先生に師事し、昭和9年に卒業後まもなく、白葉先生の御長女と結婚し、中村家を継ぐこととなった。卒業後は幾つか職を変えられたが、昭和14年に陸軍大阪幼年学校にロシア語教官として就職され、それ以後、戦後明治大学で約30年間教鞭をとって70歳の定年で退職されるまで、終年の前後数年をのぞいて、ロシア語・ロシア文学の教育にたずさわられた。その間に東京大学教養学部や青山学院大学の教壇にも立たれていた。

氏が生涯で最も心血を注いだのはロシア文学の翻訳紹介であったことは、言うまでもない。その訳業には『死せる魂』、『けむり』、『ルージン』、『戦争と平和』、『アンナ・カレーニナ』、『サハリン島』など19世紀ロシア文学の大作があるが、代表的な翻訳として挙げたいのは、戦争中に訳を進められ、戦後昭和23年から29年にかけて次々に発表された『ガルシン全集』2巻、A. K. トルストイ『白銀公爵』、コロレンコ『マカールの夢』、『盲音楽師』等、初期のお仕事と、岳父白葉先生との共訳『トルストイ全集』（河出書

房新社)である。後者では日記・書簡の全部と論文の大部分を分担されている。冬の寒さのなか明治大学第二部の授業のあとも1日も欠かさず仕事を続けられていたと言う。氏はその言葉のよい意味での翻訳家であった。

氏は酒をこよなく愛し、軽い脳硬塞のあとも酒を止めなかった。少しはにかむような笑みを浮かべながら口にする毒舌も、もう聞くことが出来ない。

佐々木秀夫先生を悼む

小 島 基 次

昨年度の学会が早大で行なわれた一週間後の10月21日に、先生は享年64歳で永眠されました。先生は本学会にとっては昭和27年の第一回からの研究発表者として、ほとんど毎年のように研究報告をされてこられたことは広く知られており、また中部支部の理事としても御尽力されてきました。このような先生を突然失ったことは私達にとって痛恨の極みであります。

先生の専門分野は周知のようにロシア語史とロシア古文で、ほぼ独自で築かれてこられた分野だと思われます。先生のこの専門分野は東京外国語大学の講師として遺憾なく発揮され、実に25年もの長きに渡って学生たちに御熱心に教授されてきました。私が学生として先生の講義と演習に参加させてもらい得たものは、語史の講義における息継ぐ暇を与えぬ程の板書の速さや、古文演習における一語たりとも疎かにせぬ古文読みの緻密さなどでしたが、これこそ正に先生の真骨頂と言うべきもので、教場で学生たちに接して教えることが生き甲斐だったのだと思えてきます。先生の教場での実践は、『ロシア古典』シリーズに如実に反映されており、特に《音韻考》は優れて教育的な配慮がされた、歴史的な記念碑に値する程の名著だと見なされています。

講師をやめられた後は、私が世話役となり同好の士を募って、先生はロシア古文研究会 KOJIO を主宰されてきましたが、月一回の例会の折には自前で浜松から上京されて、6年間も私たち会員に厳しさと愛情を持って指導に当たられました。KOJIO の研究活動は《文献註釈》の形でまとめられ、その2冊目の刊行と同時に逝去されたことになります。

残された私たちの使命は、生前の先生から直に頂いた薫陶の数々を礎にして、先生の目指されたものに一步でも近付く不断の努力しかありません。慈愛に溢れた先生のこれまでの御恩に感謝しつつ、ここに謹んで御冥福をお祈り致します。

◎1990年度(第39回)総会・研究発表会は下記の要領で早稲田大学文学部において開催された。

10月13日(金) 午前 開会式, 研究発表会。